

であるが SEH-4 では $4.2 \text{ g/cm}^2/\text{h}$ で非常に大きい。

(6) 窒化試験

標準成分のものにつき NH_3 ガスおよび NaCN 系溶融塩による窒化試験を実施したが、 NH_3 ガスによつても比較的容易に窒化が進行し、また NaCN-BaCl_2 系滲炭窒化剤によつて $700\sim 1050^\circ\text{C}$ で試験した結果は温度の高い場合には滲炭窒化速度が大となるが表面硬度が低下し、温度が低い場合には滲炭窒化速度は小となるが表面硬度が高くなり、たとえば $800^\circ\text{C} \times 5\text{h}$ では表面硬度 $\text{HV } 800$ 、深さ 0.1 mm が得られる。

III. 結 言

以上 $\text{C } 0.6$, $\text{Si } 0.2$, $\text{Mn } 9.0$, $\text{Ni } 4.0$, $\text{Cr } 21.0$,

$\text{N}_2 0.4$ を基本成分とした“21-4N”系弁用鋼の C , Si , Mn および Ni をそれぞれ変化させ、 W , Co を添加して種々の試験をした結果 Ni が 4% 付近で常温および高温の機械的性質が高いことを確認した。 Si は 0.5% 以下で機械的性質が高く PbO による腐蝕減量もこの付近で最も少いことが判明した。 N_2 の添加は機械的性質の改善に有効であることおよび W , Co の添加が機械的性質を高めることを確認した。

以上の基本成分のものを現用の SEH-4 に比較すると常温および高温の機械的性質が高く、熔融 PbO による腐蝕にも強いことが判明した。

編 集 後 記

△ 本年は暖冬異変で、1月から2月にかけて春めいた日がつづき休火山の噴火、地震など、いささか大自然に異常はありましたが、会員各位には愈々御健勝のほどお慶び申し上げます。

△ 会誌“鉄と鋼”も巻を重ねること 45、この間終戦直前直後の不可抗力の年を除き滞りなく発行を続けて来ましたことは一重に会員各位の御協力の賜であると感謝致します。会誌の内容も体裁も会員諸兄の御要望に順応して改善に努めていますが、なお不備の点が多々あると思しますので御遠慮なく読者の声として御高見をお漏らし下さるようお願いいたします。

△ さて、本3月号は来る4月1, 2, 3日東京大学で行われる講演大会の予稿を取りまとめた特集号であることは御承知の通りで、これは止む得ない事情で大会に出席されない会員の方々に、講演内容の大略をできるだけ詳しくお知らせするために、昭和27年秋季大会の分から始められたものであります。それ以前は各講演者の予稿はほんの5, 6行位のもので、出席者のみに印刷配布したものであります。この特集号は毎号、普通号の約2倍半で経費もそれだけ多くかかりますが、幸にして爾来好評を得ています。

△ ところで、従来講演会場で講演者から講演中、この特集号を前にして往々ミスプリントを指摘されます。特集号に限り著者校正を省略しています、というのはとかく投稿が遅れ勝なので、従つて内容の検討、図表の凸版作製その他の編集事務が遅れ、編集委員総がかりで校正に努めても、印刷できあがりざりざり一パイというところで多数の講演者の方へ著者校正に回らす時がありません。講演者の方でも寄稿規程に定められたページ数、図表数の範囲内に予稿を書かれるのはお骨折りのことであろうとは思いますが、急いで投稿されるため字句数字に書き違いがあるかも知れぬと思います。化学成分などの数字は特に原稿通り注意して校正していますが、なおミスがあり恐縮している次第であります。

△ 特に申し上げたいことは、図および表中の文字は英文で書いて頂くことに規定してありますが、執筆を急がれるためか邦文で書き放しの方が多々あります。これも著者へ訂正のため御返送する時がありませんので当方で英訳せねばならぬ手数と時間を要します。叙上のような次第で、本号においても、校正に極力努めました、なお多少のミスプリントがあろうと思ひます。なにとぞ御海容のほどをお願いすると同時に次回大会の予稿は締切日に悠々間に合うより早目に寄稿規程通り御寄稿下さるようお願いいたします。(三宅記)